【表紙】

時代映画　四郎五郎
銘刀鍛冶　五郎正宗

【表紙裏】

第一、九四五号
銘刀鍛冶五郎正宗
五巻　三、八七六呎
十四年五月八日

A一、三二〇号
五巻　一〇九三号［メートル］
十五年五月廿四日
十八年五月廿三日

≪註≫ A一三二〇号は内務省映画検閲番号。通検年月日は一九二六年五月四日（五月二四日は間違い）。検閲台帳（検閲時報）の題名は、角書きの「銘刀鍛治」が省略された「五郎正宗」のみ。長さは五巻一〇九三メートル。製作者及び申請者は国際活映で、天活の後継会社。現存版の長さは八〇一メートル＋一九二メートルで九九三メートル、一九二六年時点の長さ一〇九三メートルとは一〇〇メートルの違いで、時間は 15fps で換算すれば一〇九三メートルが六四分、九九三メートルが五八分となる。

【前付】

銘刀鍛冶
孝□美談
五郎正宗
全五巻
三十五場
［印］東京市淺草區馬道町二丁目拾番地
テラオフヰルム商會
電話　淺草　四八

【前付裏】

A一、三二〇号
五巻　一〇九三号米
有効期間
十五年五月四日
十八年五月三日
五郎正宗

【1丁】
銘刀鍛冶
孝子美談
五郎正宗
全四巻
卅五場
マークと場割

第一　郷土の娘鍛冶に恋す　八幡社額堂
〃二　行光お秋を娶る　行光仕事場
〃三　銘刀を鍛へんと誓ふ　八幡宮社前
〃四　舅の情けに京へ出立　藤沢宿外れ
〃五　行光御番鍛冶と成る　九條殿舘
〃六　美しき侍女の介抱　仝長廊下
〃七　後日の証據に筐の短刀　三條橋詰
〃八　産婦が臨終の遺言　五太夫住家
　　此の間拾ヶ年経過

【1丁裏】

第九　孫の行末を頼む　小田原街道
〃十　桶屋の腕白小僧　行光住居内外　二場
〃十一　行光五郎を弟子とす　桶屋見世
〃十二　五郎親子の名乗り　行光住居
〃十三　お秋嫉妬の怨言　お秋居間
〃十四　生傷の絶間無し　仝　台所
〃十五　又復継母の折檻　仝　病間
〃十六　孝子雪中に水行す　井戸端と台所　二場
〃十七　お秋愈々五郎を憎む　元の病間
〃十八　孝子身を投げんとす　由井が浜辺
〃十九　往来中で兄弟喧嘩　雪の下町端れ
〃二十　舅嫁の悪心に怒る　国光住居

【2丁】

第廿一　五郎母に急を告る　途中と住居　二場
〃廿二　孝子の一心継母の悔悟　八幡宮石段
〃廿三　楠正成の使者　行光住居
　　再び五ヶ年経過
〃廿四　五郎銘刀を鍛ひ上る　井戸端と仕事場　二場
〃廿五　五郎楠家へ伺向する　楠正成舘
〃廿六　三尺の秋水銘名も何のその　仝舘庭前
〃廿七　庭前に怪しき女性　九條殿舘

〃廿八　銘刀の威徳怪鳥を退治す　空中と山中　二場

登場名

一、五郎正宗　一、藤六左近太夫行光
一、森川右馬之丞　一、神職半太夫

【2丁裏】

一、堂守の老婆　一、娘お秋 後に 行光の妻
一、行光弟子定吉　一、仝 留造
一、仝 三太　一、女中お作
一、関白九條殿　一、柳原式部太夫
一、関白姫君　一、侍女 楓
一、楓の父五太夫　一、母 渚
一、行光一子新太郎　一、怪女 実は 怪鳥
一、桶屋甚兵衛　一、医者竹庵
一、新藤吾国光　一、仝女房おりつ
一、楠正成　一、嫡男 正行
一、家臣江見野良三　一、牛飼舎人四人
一、侍女大勢　一、侍臣大勢

【3丁】

一、仕丁大勢　一、町人大勢

時は後醍醐天皇の元弘、建武、延元、年間の出来事

【3丁裏】

タイトル　第壱　郷士の娘刀鍛冶に恋す（八幡社額堂）

相州鎌倉八幡宮額堂の体（頼朝造営以前の古社）
爰に床几二脚程並べ堂守の老婆神職室越半太夫
と語り居る。
折柄扇ヶ谷の郷士森川右馬之丞は娘お秋を伴ひ
出で来り休む。老婆茶を出す。

半　是は〳〵右馬之丞殿御息女御同道にて
御詣りで御座るかな

右　オ、御神職半太夫殿で厶ったか
其後は無沙汰を致して厶る

半　それはお互で厶る。夫れに就ても何時も乍ら
お秋殿のお美しさ、嘸かし諸方から御縁談

【4丁】

も厶ろうな

右　否々何と申すも御覧の通り不束者
　　未だ良縁もムらぬがお心当りもムらば
　　是非御世話が願ひ度い。
秋　アレ若し父上様往来中で其様な事を……。
右　否、ハハハ……宜いわサ何うで一度は持たねばな
　　らぬ良人じやわ、
半　喃半太夫殿
　　左様でムるとも、手前も精々心掛け良い聟君を
　　お世話致すでムろう。
　　イヤ思はぬ長話を致した
　　お帰りには手前方にて御休息下され。

【4丁裏】

右　忝ふ存ずる
　　是にて半太夫は一礼して退場
　　其の時雪の下の住人刀鍛冶藤六行光朴鞘の短
　　刀を包みし風呂敷包を持ち出で来り
行　夫れにお居で成さるは森川様でムりましたな
右　オヽ行光殿か是へ〳〵。
　　シテお手前も御参詣かな
行　はい、実は兼ねて御誂への短刀が鍛へ上りました故
　　只今御宅様へ持参致しました処当方へ御参詣
　　と承りお跡を追ふて参りましてムりまする
右　夫れは〳〵御苦労でムった。デハ早速拝見致うかな
　　ウム適れ業物、イヤ忝け無い〳〵

【5丁】

秋　何と娘見事なものであらうがな
　　ホンにまあ立派な好いお刀でムヤなァ
　　そんなら貴方様が……。
　　お秋恥かしきコナシ
右　そして何時も私が噂をする藤六行光殿と云ふて
　　雪の下の刀鍛冶じや。御挨拶をせい。
行　行光殿是が手前の娘でムる。
　　是れは〳〵、初めてお目に掛りまする
　　毎度御ヒイキに預り舛て有難ふ存舛る
秋　私が秋と申す不束者何分宜しゆお願ひ申舛
右　時に行光殿色々御礼も致し度いが、手前の
　　宅迚御越し下されぬか。

【5丁裏】

行　はい有難ふは存じ舛るが今日はちと急ぎの仕事を掴へて居り舛れば明日にも又改めてお伺を致し舛る。

右　左様なら然らば明日は是非お出下され。

秋　屹度お待ち申して居り舛る。

行　ハイ、必ず御伺ひ致しまする、デハ失礼乍ら是でお別れ申舛る

　と行光立去る、お秋恋慕の体にて見送る。

右　茶代は是へ置くぞよ

　デハ娘そろ〳〵参らうかな、是娘、是サ娘…お秋ツ

　と肩を打つお秋恥かしきコナシにて顔を隠す。

【6丁】

右　ハテ何を見て居るのじや、ハッハッ……

タイトル　第弐　行光お秋を娶る（行光仕事場）

　雪の下の刀鍛冶行光住居仕事場の体

　行光は弟子の定吉を向ふ槌に廻し刀を鍛つて居る。其の時神職半太夫急ぎ来り

半　オ、行光殿内にか。イヤ目出度いぞ〳〵。

行　是はどなたかと思ひましたら半太夫様、目出度とはお祭りでも出来ますかな

半　イヤモウ祭り処の騒ぎでは無い、モット目出度いあなたの身の上。日本一の果報者じや。好い花嫁が出来たぞよ。

【6丁裏】

行　ハーア花嫁とはそりや誰方でムるな

半　是れ行光殿落ち着いて居る処じや無い相手は名に負ふ扇ヶ谷で一万石の田地持。その一人娘が貴方を見かけてスッカリ惚れ込み、夫れからコッチはブラ〳〵病ひ。恋わずらひ迚させるとは罪じやぞよ〳〵。

行　何を下らぬ事を、今日は仕事が忙しい。冗談なら、おいて下され。

半　其の身の出世と云ふものじや。よもや不承知はあるまいがな。

行　いゝや不承知ぢや、其那縁談なら何うぞ断

つて下され。

【7丁】

半　エ、此の良縁を断れとは

行　身不肖なれ共藤六行光禁庭様の御枕刀をも
鍛へる大事な望ある者他の家へ養子に行く身
じやムらぬ、トット茲を帰らっしゃい。是れ定吉、
半太夫殿を門口迫送り出せ。

定　ハイ。コウ〳〵神主さん、お帰なさい。
　此の時右馬之助[丞]お秋を連れ来る。

右　アイヤ、いづれも方、御待ち下され。

行　オ、貴方は森川様

右　貴殿を養子にと思ひしは拙者一生の誤りでム
る。定めし御気に召すまいが改めてお秋をお
送り申すでムらう。御受け取り下され

【7丁裏】

行　有難ふ存じますが此の義は平に御断り申す

秋　最う此の上は（自殺せんとす）

行　あゝ是れ、早まった事を（其手を留る）

半　ム、、幸ひ此の金槌で頭を砕いて死んで見せるわ

定　コウ〳〵飛んでも無い、そんな真似をしやァいけねへ

秋　何うぞ放して、殺して下さりませ

行　否々、滅多に爰は放しませぬぞ

秋　ソンナラ、私の願をば

行　それじやと云ふて、其儀ばかりは

一同　サァ〳〵〳〵

右　是非共得心下されよ

定　親方此奴ァ、一番考へ者だぜ。

【8丁】

行　ウム、見る影も無い行光をば夫れ程迫の思召、
如何にも女房にお貰ひ申さう。

秋　エ、スリヤお叶へなされて下さりまするか

右　何んにも云はぬ、忝けない。
　第三　銘刀を鍛へんと誓ふ（八幡宮社前）
　爰へ行光、お秋（女房の拵へ）一子新太郎（
　当才）乳母に抱かせ参詣の態にて出で来る。

行　お秋や坊は大層おとなしい様だの

秋　はい、好い心持でスヤ〳〵と寝て居り舛るわいナァ

行　オ、然うか、何にもせよ、お参りをするとしよう。
　　ト三人社前へ参り合掌なし
行　南無八幡大菩薩、一生に一度行光が御番鍛

【8丁裏】

秋　冶に成れます様御利益御授け下さりませ。
　　又二つには、我子新太郎が身の行末お守り下さいませ
　　南無八幡様〳〵。
　　ト両人礼拝なし行かんとする此の時社の蔭より
　　右馬之丞出で来たり。
右　オ、聟殿、お秋今日は孫めが宮詣りじやのー
行　是れは〳〵舅殿貴方様も御参詣で厶りまし
　　たか。
秋　父さん宜い所で御目にかゝりましたなァ
右　ドレ〳〵孫めを一寸見せて下され、オ、僅か見ぬ
　　間に可愛うなり居った。時に行光殿今
　　是れにて承り居れば一生一度の御番鍛冶に成り

【9丁】

行　度いとの願ひ就ては此度京都関白九條殿
　　の御触れ出しで日本国中の刀鍛冶に申つけ
　　恐れ多くも一天万乗の大君の御守刀を折たすと
　　の事何と其方都へ上る心は無いか
右　はい御詞迫も厶りませぬ、是非納め度いとは存
　　舛れど何を申すも多勢の刀鍛冶、殊に京都へ
　　上り舛には夫れ〳〵の手続き莫大の費用、私
　　如き未熟者には及ばぬ事かとあきらめて
　　居り舛る。
行　其の気遣は無用に致せ、手続万端費用の
　　処は此の右馬之丞が肝入り致すぞ
右　エ、スリヤ貴方が何かの事を？

【9丁裏】

右　サ、其の代りには天晴れ名刀見事仕
　　上げて見せて下され
行　及ばず乍らも一心込めて鍛へ上げるで厶りませう
右　オ、それ承って安堵致した、何かの事は帰
　　宅の上ゆる〳〵相談致すと致さう。
行　有難ふ存じ舛る。
右　オ、孫よ泣くな〳〵、父の出世を待つのが好いぞ

第四　舅の情に京へ出立（藤沢宿外れ）
爰へ行光弟子二人に刀を入れたる小
さき唐櫃（注連を張り御用の机を附す）
跡より右馬之丞、お秋赤児を抱き定
吉送り来る。

【10丁】

行　舅殿には御見送りの程恐入って厶りまする。
斯く京都へ上れまするも皆貴方様の御厚
恩決して忘れは致しませぬ。

右　何んの〳〵其礼には及ばぬ事一日も早く御
番鍛冶に成って呉れるが私の望みで厶る
では急で参るがよいぞ。

行　左様なれば是れにてお別れ致しまする。

秋　若し行光殿随分途中気を附けて目出
度お帰りを待ち舛る

行　オ、お秋そなたも留守中を大切に坊の
面倒を頼むぞよ。

定　それぢや　親方、確かりやっておくんなされませ

【10丁裏】

行　オ、貴様も留守を頼んだぞ、左様なれ
ば舅御様

右　オ、首尾様う帰国を待ち居るぞ

第五　行光御番鍛冶と成る。（九條殿舘）
京都九條殿上段に関白、三寶に乗せ
られたる刀箱を前に一刀を検分なし居
る平舞台に柳原式部太夫下手に藤
六行光平伏なし其他侍臣大勢並び
居る。関白は一刀を鞘に押し頂ひて

関　ウム、天晴れなる業物哉、是りや相州雪の下
の住人行光とやら面を上げよ

行　ハハァ……。

【11丁】

ト行光恐る〳〵面を上げる。

関　此度諸国の刀剣を持参なしたる劔の内其の
方が鍛へし一刀恐らく並ぶ者なし。従って是
なる御劔を恐れ多くも大君の御守り刀に奉
り今日改めて其方を左近太夫に仕官なし当

年御番鍛冶を申し付くるぞ。

式　ハハァ……

　ト墨附を受取り

式　是りや藤六勿体無くも関白殿下の御朱

　印有難くお受け致せよ。近う。

行　ハハァ。身に余りたる御錠、有難くお受

　け致すで厶り舛る。

【11丁裏】

関　此の上は式部太夫、彼に酒肴を取らせ今宵

　は一泊許し遣はせ。行光大儀であったのう

　ト是れにて関白先に侍臣附添ひ奥殿

　へ入る。

式　是りや藤六上々の御前の首尾嘸満足であらう

　のう。

行　ハハッ。是も偏に貴方様の御引廻し厚く

　御礼を申上げ舛る。

式　是りや、誰そあるお申附けたる酒肴持参

　致せよ。

婆　ハハァ……

　ト次の間より侍女大勢三寶に乗せた

【12丁】

　る土器及肴等持ち出で行光の前に並

　べズット後より侍女楓長柄の銚子を持て

　立出る。

楓　ハァ…左様なれば失礼乍ら

　ト楓立寄り酌を為さんとして行光と顔

　を見合せ両人はっと恥しきこなし。

　楓はなみ〳〵と酌をなす行光気を替へ

　盃を頂き

行　有難ふ頂戴致すで厶りませう。

式　オ、今宵は夜を共に過すが宜いぞ

　第六　美しき侍女の介抱（仝館長廊下）

　爰に行光酒に醉ひ蹌踉として来り。

【12丁裏】

行　心嬉しく過したせいか　コリヤ大分酩酊致した

　風に吹かれて醒すと仕やうか。

　ヲ、　コリヤ一時に醉を発して、アツ痛ツ、ムウ

ト行光癪が起りし体にて廊下に倒れる。
此の時侍女楓雪洞を持ち来り
楓　オ、貴男様は最前の御方様大層御苦し
みの様子、お気を慥かにお持ちなさりませ
モシ何うぞなされましたかナァ
ト介抱する。行光心づき
行　オ、最前のお女中か……呑めぬ御酒を
嬉しさの余り一杯二杯と過せしせいか俄に
起る持病の癪。アッ痛ツ、ウム

【13丁】
楓　それはまあ嘸お困りで厶りませう　オ、幸
ひ持参の薬、是れなと召って暫らくお気
をお鎮めなされませ
ト楓は急ぎ薬を出し水を飲ませ背を
さすり介抱する、之にて行光の癪おさまり
行　忝けない御介抱お陰様にて激しいさし込
みもをさまりまして厶り舛る。お礼は言葉
にて尽されませぬ
楓　勿体無い其の御言葉、それで私の念
も届き、……イヱ何を云ふも此所はお廊
下身体が冷へましてはなりませぬ。少しも
早う御寝間にて御休息なされませ。

【13丁裏】
行　何から何まで御親切に有難ふ存じます何
分宜しく御願ひ致しまする。
楓　左様なれば妾が御案内致しませう。
ト立上り行かんとしてヨロ〳〵となる。
楓　アヽモシ　お危ぶのふ（ト手ヲ取ル思ヒ入レ）
厶りまするぞへ
第七　後日の証據に筐の短刀（三條橋詰）
爰へ一疋の黒牛綱を放れて狂ひ来り走
去る。牛飼四人追かけ来り。
舎人　アツ〳〵牛は向へ逃げたぞ、必ず共に怪我すまい
ト四人ワヤ〳〵云ひ乍ら牛を追ひかけ来る。

【14丁】
此時行光出で来る跡より楓被衣を冠り
追ふて来り其袂を掴へ

楓　ア、モシ暫くお待ち下さりませ
行　シテオ手前は何人で厶り舛るな
楓　ハイ妾で厶りまする
　　ト被衣を脱ぐ、行光びっくり
行　ア、昨夜計らず舘にて
楓　ハイ厚いお情け受けました。其の嬉し
さの忘れ兼ねお跡を慕ふて参りました
御帰国遊ばすならどうぞ妾も共々お連
れなされて下さりませ
行　是はしたり、其う云はるゝは御もっともなれ共お

【14丁裏】

身は大事な御奉公、又私とても御番鍛冶
に仕官受けて一度は国元へ帰らにやなら
ぬ身の上、又来春は改めて当地へ上って来る
程に夫れ迄待って居て下され。
楓　イヱ〳〵其様な事仰有って御見捨なさ
るお心か、御恨めしゆ厶り舛る。
行　ハテ聞訳無い。何で其様な事が有る
のか　そなたの疑ひ晴らす為め私が手づか
ら鍛への此の短刀、又逢ふ迄の筐として
そなたに渡して置き舛ぞよ。
楓　そんなら之れを（ト短刀ヲ受取リ）そう云ふ
事なら諦らめてお便りを待ち舛る程に必

【15丁】

ず見捨てゝ下さんすな
行　人目につかはば互の身の上　早去らば
　　ト行かんとするを縋り留め
楓　アヽモシ　せめて御訣れにお所とお名をお
聞かせ下さりませ。
行　オヽ私が住居は東国にて
　　と云ひ掛けると後から（牛が放れた危
いぞ〳〵）と叫び乍ら町人大勢逃げ来
る之れに驚き行光は楓を傍らの柳の
木蔭へ忍ばす処へ以前の暴れ狂ひ
出て来るを行光牛の前に大手を拡げて
立塞がる。牛は猛然と行光を角にかけ

【15丁裏】

んとする。行光は左右に身をかわし牛と
争ひトゞ両角に諸手をかけグット押へ
止る。此時以前の牛飼舎人四人走り出
で来る夫れと見て
舎　アレ〳〵嬉しや、よう牛を留めて下された
皆の者御礼を云へ〳〵。
ト四人厚く礼を述べる。楓柳の蔭
より出んとするを行光眺めて
行　アヽコレ危い。必ず爰へ出るまいぞよ〳〵
此時牛角再び暴れんとするをシッカと押へ
行　ハテ後日の便りを（と牛を捻ぢ伏せ）
待たっしやれ

【16丁】

舎人は牛を押へる　楓木蔭に泣き伏す
第八　産婦が臨終の遺言（五太夫住居）
京都嵐山の麓木樵五太夫住居、娘の
楓は産後の病褥に寝て居る。父親五太
夫は薬を煎じ居る。母親渚は産子の
五郎を抱き、寝かし付けて居る。
やがて五太夫薬茶碗を持ち枕辺に寄
る屏風を取り退け
五　オヽ娘よ何うやら目が覚めて居る様な
薬でも呑んでは何うじやな
楓　ハイ……お戴き申し舛る。
五　オヽそうかそんなら私が起してやりませう

【16丁裏】

ト抱き起し薬を呑ます。楓は勿体無さ
さうに咳き入る。
五　コレ娘　急がずに悠くり呑むがよいぞよ
楓　はい有り難う厶り舛る。そうして坊は何れ
に居りまする。
渚　孫めは私のふところにスヤ〳〵眠って居る様
子必ず心配せぬがよいぞや
楓　父さん母さん永らくの御介抱御苦労かけて
済みませぬ
五　ハテ何を云ふぞい親子の中に遠慮はいら
ぬ一日も早うようなって親に安心させて呉れよ
楓　勿体無い其の御詞、なほりたいは山々なれ共何

【17丁】

を云ふにも此の重病、夫れにつけてもお二人
様へ今迄御包み申しましたが何をかくさう
其子の親は東国辺の刀鍛冶いつぞや御殿の
御給仕に思ひ染めたが身の因果。皆此の身
のいたずらから……
御奉公も成り兼ね、お年寄られた御二
人様に我が子の御世話此の身の介抱、空恐
ろしの不幸の罪、お許しなされて下さりませ

五　オ、娘よう折明けて云ふて呉れたして其の御
方のお名前は

楓　サアふとした事からお名前も聞く隙さへも
泣く〳〵に又逢ふまでの印ぞと筐に残

【17丁裏】

る此のたん刀
　ト床の下より以前の短刀を出し

楓　其侭におわかれましたが、五郎が成人の後ち
〳〵は此の一品、証據として行衛をたづねて下
さりませ

五　オ、気遣ひしやんな斯う云ふ確かな証據
があれば仮令へ名前は知れず共屹度尋
ねて名乗りをさせう。必ず心配せまいぞよ。

楓　ウ嬉しう厶んす其御詞を聞く上は思ひ残り
は厶んせぬ。

渚　ア、コレ娘其様な悲しい事必ず云ふてたもん
なや五郎の事は安心して早う達者になって

【18丁】

下されや

楓　母さんどうぞ五郎を一度妾しに抱かせて下
さりませ

渚　乳を含ませてやるのがよいぞよ。

楓　オ、五郎よ仮令母は無いとても父御の行
衛を尋ね出し立派に其名を挙げてたも。
母は草葉の蔭からそなたの身をば守り舛ぞ
　ト楓はウットリとなる。

五　之れ娘何うしやった。之れ娘、娘、

渚　気を慥かに持ってたも娘、楓ヤーイ。

楓遂に絶命す。
此の間拾ヶ年経過の事

【18丁裏】
第九　孫の行末を頼む（小田原街道）
小田原の松原。五太夫は順礼姿に
て腹痛に悩む。同じく順禮姿の五郎（
当時十才）に手を引かれて杖を突き出で
来り

五郎　お祖父さま　まだ痛みはなをらぬかへ。
五太　イヤ〳〵そなたの御蔭で大分楽になった様じや
　　爰で暫らく休んで行くと仕様。
五　　それぢや俺がさすって上げようよ。
　　ト五太夫松の根に腰を掛ける五郎其の
　　脊をなでる
五太　モウよい〳〵そなたも爰で一休みするがよいぞ。

【19丁】
五郎　アイ〳〵。
　　ト五郎五太夫の傍へ腰を掛け。
五郎　そうしておぢいさま。お父さまの御家は未
　　だ遠いのかへ。
五太　エッ……イヤ親人の家は東国で刀鍛冶と聞い
　　た故やがて知れる事があらうとは云うものゝ毎日
　　々々、尋ね探せど今以て知れぬと云ふのはよ
　　く〳〵尽きた親子の縁……イヤモウ雲を
　　あてじやわへ。
五郎　そんならお父さまに逢はれませぬか……
　　ト泣き伏す。
五太　アヽコレ〳〵泣く事はない心配するな此のぢ

【19丁裏】
　　いが一念でも逢はさで置くものか、夫れにつ
　　けては廻り合ふに大事な証據は此の短刀。
　　ト腰に附けたる風呂敷包みの短刀を出し
五太　今からそなたにやる。確かり持って居やうぞ
五郎　そんなら此の刀を持って居たらお父さんに逢
　　はれるのかへ。
五太　オヽ逢へる共〳〵、死んだそなたのお母ァや婆
　　さまの思ひでも屹度逢へる時があらう。サァ

爰へ来い
ト短刀を五郎の脊へ結び附け
五太　サアソロ〳〵と出掛けやう。
五太夫急に差込み苦しみ倒れる五郎

【２０丁】
びっくり
五郎　モシおぢいさま、気を確かに持って下されモシ
おぢい様いのう……
五太夫悶絶する、五郎縋り付き泣き叫
ぶ此時桶屋甚兵衛旅行姿にて通り
掛り此の体を見て
甚　オイ〳〵何うした。ヤツ病人の様だな
五郎　おぢいさまが死んで仕舞ひます。モシおぢさ
ん助けて下さりませ。
甚　そいつあ大変だ、よし己れが押へて居るから早く
水を汲んで来ねへ、早く
五郎　アイ〳〵

【２０丁裏】
ト五郎は順禮の柄杓を持ち小川より水
汲み来る。
甚　コレ旅の父さん、コリヤ道了様の御符だぞ
サア確かり仕なせ〳〵。
ト水と御符を呑ませ介抱する。五太夫
漸く心付く
五太　オ、孫よ。オ、ツ何れも御方様かは存じ
ませぬが御手厚い御介抱、ア有難う存じ
舛る　迚も助からぬ私の命、此の孫めが行末
を御慈悲でムり舛る。ムり舛る。
ト手を合す。
甚　心配しなさんな己は鎌倉雪の下桶屋の甚

【２１丁】
兵衛と云ふ者だ。道了様へお参りしての
帰りがけ、お前を介抱すると云ふのも何かの縁
だ。引受けたから安心しなせへよ。
五太　ア、……五郎……よ　タ……達者で……居
てク呉れよ。
甚　コレ〳〵つまらねえ事を云ってゐちやいけねへ、

しつかりしなせへ
ト甚兵衛五太夫の手を取り肩へかける
五太夫ウツトリとなる。
五郎　お祖父さま……（と縋りつき泣き入る）
甚　オヽ可愛想な……事だなァ
第十　桶屋の腕白小僧（行光住居仕事場）

【21丁裏】
爰に兄弟子の定吉鞴の前に横座に
座し弟子の留造、三太、両人向ふ鎚に廻
り刀を鍛ち居る。
桶屋の小僧五郎市、手桶、古釣瓶等
をかつぎ
五　桶屋――タガの仕かへ、桶屋――。
ト呼び乍ら出て来る。そっと窓の内を
窺き自分の持って来た釣瓶を台にして
覗く。仕事場に三人は刀を鍛ち居る。
五郎は窓より首を出し
五　ヤア相変らず屁ぴり腰をやってるな困ったも
んだなァ

【22丁】
定　オヤ桶屋の小僧奴亦来やがったナ
留　うぬ生意気な事を吐すと承知ァ仕ねへ
ぞッ
五　だって屁っぴり腰だから屁ぴり腰って云ふん
だ。爰の内の叔父さんは上手だ。お前達
は下手だなァ。
其んな事で碌な仕事は出来ないよ。
三太　オヤこん畜生ふざけた事を吐かすと叩く
ぞ
五　お前達が来る内にや俺らの方にも足がある
からとっとの昔に逃げて仕舞ふさ。
留　野郎モウ勘弁が出来ねへぞ

【22丁裏】
ト留造持ちたる鎚を投げ出すと
五郎驚きて窓より離れ傍への松
の木に昇り身を隠す。
留造出で来り四辺を見廻はし

留　いま〳〵しい畜生だナァ
　トつぶやき〳〵退場、
　五郎松の木より飛び降り舌を出
　し再び窓の下へ忍び寄る。
　仕事場へ留造立腹の体にて入り来
　る。定吉見て
定　どうした留、捉まったか
留　兄貴駄目だあんな素ばしこい餓鬼は有

【23丁】

　りや仕ねへ。とう〳〵逃げて仕舞った。
定　さうだらうあんな小僧に構はねへで早く
　此の仕事を上げて仕舞はねへと又親方
　から大小言だぞ。
　モウ一息だ確りやれ〳〵
　ト三人又もや仕事にかゝる。此の時五
　郎再び顔を出し
五　ヤァ又屁ぴり腰が始まったナ
留　オヤ此野郎
　ト窓の内から五郎の手を確っかり押へ
留　モウ今度は逃さねえぞ、オイ三太
　表へ廻れ。ぶん捉かまへろ

【23丁裏】

三太　合点だ
　ト急ぎ退場
　元の窓にて五郎は腕首を押へられ苦
　しまぎれに留吉[留造]の腕へかみ付く。
留　アッ痛ッ
　ト叫び手を放す此の隙に五郎は一
　散に逃げる。其処へ三太出で来り
　五郎を追ひ掛ける。
　留吉も続いて出で来て追ひ掛け
　遂に五郎を両人にて捉まへ引ず
　り来る。
五　御免よ〳〵モウ云はないから堪忍して

【24丁】

　お呉れよ。
両人　ナニ、今更勘弁が出来るものか。

と両人にて打ち据へる。其処へ定
吉出で来り
定　コラ〳〵二人、モウ好い加減で勘弁して
やれ。
三太　コンナ餓鬼は後日のコラシメだ。
と五郎詫び入るを両人にて打ち据へ
んとする時窓の内より行光顔を出
し
行　コレ〳〵騒々しい。其那小僧を捉へて手荒
な真似をしてはならねへぞ

【24丁裏】

定　オー親方だ〳〵。
と両人を鎮め
定　親方聞いておくんなさい。実は此処に居
る小僧が毎日々々窓の外へ来て此奴等
の仕事を見ちや屁ぴり腰〳〵と悪口
を云やあがるもんですから二人が怒って折
檻をして居る処なんで
五　お前だってあんまり巧かあねえや
定　オヤあんな事を云やあがる。
行　まあ待ちねへ〳〵そりや小僧が豪い。小
僧の云ふのが尤もだよ。
定　ジョ冗談じゃムいませんぜ親方迚そんな事

【25丁】

仰有るぢや困りますよ。
行　それでも我が目からそう見えるから……
小僧貴様人の事を悪口云ふ位ではちっとは
此の鎚が打てるか。
五　そうですねへ、爰に居る屁ぴり腰の人位ひ
にや打てない事もありますまいよ。
留　
三太　何を吐かしやがる、畜生まだあんな事を
行　まあ怒るな〳〵夫れじや小僧爰へ這
入れ。一つ打って見ろ
五　エッ、夫れじや打たして下さいますか嬉
しいナァ〳〵
定　其の代り打ち損ふと承知はしないぞ

【25丁裏】

サァ這入れ這入れ、
ト定吉、留造、三太、五郎を引立て元の
仕事場へ這入る。
行光上手に座し居る　三人五郎を伴
ひ来る。

行　定吉貴様其小僧を向へ廻して一つ打たし
て見ろ

定　承知しやした。コレ小僧支度をして確
かりやれよ。

五　大丈夫です。夫れぢや定さん巧くやんね
へよ。

定　あんな生意気な事を吐しやァがる。

【26丁】

是より向ふ鎚に廻り定吉と共に刀
を打つ行光始め三人其の巧みなるに驚
き呆れる

行　小僧もういゝ〳〵成程人の悪口を云ふ程あっ
て身体の構へ槌の入れ方実に見上げたものだ
そうして今迄何処の鍛冶屋に奉公して居た
のだ？

五　私は桶屋の小僧ですから何処の鍛冶屋に
も参りません。鎚を打のは始めてでム
います。

行　何？今日が始めてだ。コレ定吉始め二
人の者　何と感心な者ではないか

【26丁裏】

定　イヤモウ、此の小僧どうして鎚の持ち方を
覚えてゐたのぢや

五　ハイ、私は刀鍛冶になるのが望みで毎日々
々御宅の店で皆様の仕事を見て覚えた
ので厶りまする。モシ叔父さん何うぞ
私を親方の弟子にして下さいませ

行　ウム、好きこそ物の上手なれ、そりや次第
に依っては弟子にしてやるまいものでもない
が一應貴様の主人にも相談した上で
何とかして遣はそう

五　そんなら内の親方が承知したらお弟子

にして下さいますか、それぢや叔父さん

【27丁】

行　直ぐに桶屋へ行って掛合って下さいまし
　ハテ忙しい奴だ、夫れでは兎に角行くと
　仕様か。
　第十一　行光五郎を弟子とす（桶屋見世）
　爰に甚兵衛仕事を爲し居る処へ行
　光入り来り。

行　ハイ御免よ。

甚　是れは〳〵親方で厶りましたか、サァどう
　ぞこちらへ。そうして何ぞ御注文でも。

行　イヤ注文では無いがお前さん所に五郎
　と云ふ小僧が居る筈

甚　ヘイ居りますですが何ぞ御用で

【27丁裏】

行　実は其の小僧の事に就いて少し計り聞
　いて貰ひ度い事がある。

甚　エーッ親方どうか勘弁なすって下さいまし
　彼奴位い仕様の無へ奴は厶りませんので叩
　き出そうにも小田原から拾って来たので帰
　す処は無し困り切ってゐるんで厶ります、ど
　んな悪さを仕やあがったか存じませんが、何う
　か充分にお懲らしなすって

行　オイ〳〵甚兵衛さん、お前は何か感違
　ひをしてゐるね、実は小僧が私の所へ
　来て云ふにや、刀鍛冶に成って見度いか
　ら是非弟子にして呉れと云ふのさ

【28丁】

甚　お前さんの方で不用の小僧なら何と手
　放して私の方へ呉げる訳には行くまいかな

行　そいつあ有難ふ厶ります　私の方ぢや
　願っても無い幸ひねんで何うか今から
　でもお連れなすって下さいまし

甚　そりや早速の承知で、何より有難い、
　併し今小田原から拾って来たと云ひなす
　った様だな

行　サァ夫れに就いて哀れな話が厶へますん

で、実は去年の春　私が小田原の道
了様へ参詣しての帰り途、六十斗りの
順禮の爺さんが、あの小僧を連れて松の根

【28丁裏】

方でウン〳〵と苦しんで居るじやムへませんか、余り可愛想になりやしたから御符を呑ませまして介抱しました処やっと気は附いたが碌に口は聞けねえんで何でも生れは京だそうで何うか此の孫の行末を頼むと泪乍らに手を合はして往生をして了ひやした。餓鬼は内へ引き取って小僧に使って居るんでムへますがイヤモウ手古摺って居るんでムへます

行　アヽソウか　夫れはまあ好い功徳をしてやんなすった。夫れに就ちやほんの少しだがあの小僧の養育料、何うかお前さ

【29丁】

んの方へ納めて置いて下さい。

甚　イヱ〳〵何と仰有ってもこりや頂けません

ト両人押問答。五郎木蔭より出で

五　桶屋の親方遠慮仕ないで貰ってお置きよ。

甚　エッ野郎其所に居やあがったか

五　鍛冶屋の親方有難ふムります。

行　おゝ五郎今日から貴様は私の弟子じやサァ甚兵衛さん是非共是は納めて下さい。

ト行光、無理に金を渡す。五郎喜び礼を云ふ。

【29丁裏】

第十二　五郎親子の名乗り（行光住居）

爰に行光新太郎（十三才）対話、お秋は新太郎を連れて父右馬之丞の処へ行って来ると云ふ

行光は舅に宜しくと云ふ、お秋新太郎退場

行　ア、何だか今日は肩が凝ってならぬ、オイ誰
　か居ないか
五　ハイ〳〵
　ト五郎下手ヨリ来リ
五　親方何ぞ御用で厶りますか
行　オ、五郎か気の毒だが二ツ三ツ肩を叩いて

【30丁】

　呉れ
五　ハイ畏りました
　ト五郎後に廻り行光の肩を叩く
行　なァ五郎、月日の立つのは早いものだお前も
　桶屋の内から貰って来てモウ彼是一年だ
　何時かは聞かうと思って居たがお前の生れ
　は京ださうだがそうして両親は達者で居る
　のかな。
五　是を聞き五郎泪にくれ
　ハイ其の両親の顔は知らず私の小さい時
　母さんは死んで仕舞ひ父さんは今以て行衛
　が知れないので厶りまする。

【30丁裏】

行　何お袋は死んで親父の行衛が知れない
　と、モウ肩は宜いから其の訳を話して
　呉れ、コレ泣いてゐては仔細が解らぬサァ
　何うぢや〳〵
五　ハイそんならお話申舛。親方聞いて下さ
　いまし（此れより浪花節）
　生れは京都の嵐山でお母さんの顔は
　知らずお祖父さんの手一つで寺子屋へやつ
　て貰ひ其の行き帰りの途中では友輩の子
　供達に親の無い子ぢや父無し子といぢ
　められるが何より悲しく何をかくそう母と
　云ふは去る上方の御屋敷へ御女中奉公に

【31丁】

　上って居て不斗した事から東国辺の刀
　鍛冶と云ひ交し只の一夜で因果の胤　名を
　も聞かず別れしが後日の筐と貰った短刀
　是れを印に尋ね合ひ親子の名乗りをさして

呉れと云ふか云はぬに息が絶え　夫れからお
祖父さんと二人でお父さんに会ひ度いと其
短刀を証據にして廻国したので厶ります
る。
行（詞）ム、聞けば聞く程哀れな身の上さうして其
の短刀とやらは、
五（詞）ハイ、大事に持って居りまする。
行（詞）ム、そんなら早く見せて呉れ。

【31丁裏】

五（詞）ハイ　御覧なすって下さりませ
ト懐中より短刀を出す、行光見て驚
き
行（詞）オ、是ぞ正しく、ム、さては一夜の情け
にて子迠諸けて相果てしか、ム、コリヤ〳〵
五郎、若しやそなたの母の名は楓とは云
はなんだか
五（詞）エッ、何うして夫れを
行（浪）知らいでならうかそちが尋ねる父と云
ふのは何を隠そう此の行光
五　エエエエ……
行（詞）サ、其の驚きは尤も乍ら此の短刀は私が

【32丁】

鍛へたもの、斯る証據を持つ上は正しく我
が子に違ひは無い。
五（詞）エ、ッ　そんなら日頃尋ねる父さんか。
行〃　伜であったか。
五〃　お父さん
ト縋り寄る
行〃　オ、ッ
ト引寄せる
五〃　お懐しゆ……厶り舛。
行〃　親は無く共子は育つ…　能くぞ成長
致したな　（浪花節終）
ト両人相擁して泪に暮れる。

【32丁裏】

廊下にお秋新太郎を連れ立聞く。
第十三　お秋嫉妬の怨言（仝お秋居間）

爰にお秋は火鉢を抱へ煙管を杖に思
案の体
傍へに新太郎春駒を持ち遊び居る。

秋　新坊や　我が身いゝ子ぢあ程にお父さんを
此処へ呼んでたもや

新　アイ〳〵
とお秋立腹のこなし、新太郎は急ぎ立
去る。

秋　ア、焦ったい、妾しや業がにへて…どうし
て呉れよう。

【33丁】

トお秋煩悶立腹の体、行光来り、

行　オ、お秋お前、何時の間に帰って来たへ

秋　ヘン、何時帰って来ようと妾の内です、夫共
飯って来たのが悪ふムんすかへ

行　何だかお前大層怒ってゐる様だね

秋　是が何うして黙って居らりやうぞえ、ねえ
お前さん。今では左近之太夫と云ふ仕官
を受けて立派な御番鍛冶に成ったのは誰
のお蔭ぢやと思ふてかや、

行　つまらぬ事を云ふぢや無いか　夫れは皆
森川右馬之丞殿の御厚恩と私は一日だ
って忘れた事はありませぬよ、

【33丁裏】

秋　ヘン旨い事ばかり、其れ忘れ無い者が
かくし子を拵らへ、イヽヱサあの五郎は一
体誰の子でムんすぞえ

行　エッ　それぢや今の様子をば

秋　知るまいと思ってもそう旨くは行きません
丁度今から十三年前京都へ上る時お前
さんは何とお云ひでした。
今度は恐れ多くも大内の御守り刀を打
つんだからと精進潔済身を清めて行った
のは何の為めでムんす、それをまああらう
事かあるまい事か、大それた京の女と、
エ、モウ妾しや腹が立つ〳〵。

【34丁】

ト武者振り付く、

行　コレ〳〵お秋腹の立つのは尤ぢやが是には段々深い様子が

秋　イヱ〳〵其云い訳を聞く耳持たぬ、大方其女を何処ぞへかくまってあるんで厶んせう。エ、口惜しい〳〵妾しやもうどうしたら此の胸が

と叫び行光の胸倉を取りこずき廻し泣き叫ぶ。

行　コレ〳〵お秋聞いたとあらば腹も立とうが私の云ふ事心を鎮めて聞いて呉れ、

ト其手を放し

【34丁裏】

行　今迄隠したのは皆私の過だ、あの折京へ上った時若気の至り、二つには呑まぬ酒を呑んだが過、五郎を我子と知ったのも今日の今、何で女を隠して置かうぞ、其の母親は産後のなやみに五郎を置いて皈らぬ旅、今は便りも身内も無い者、私の罪は重々詫びる、コレお秋、堪忍してくれ〳〵。

秋　そんならアノ五郎には母親も外の身内もないと云ふので厶んすかへ

行　木から落ちた猿同様八幡様を誓ひに立て何で私が偽りを云はうぞ、どうぞ

【35丁】

疑晴した上、今日から新太郎同様に五郎を真の我が子と思ひ何うか育てゝやって呉れ、其代り新太郎には相州流の湯加減譲り我が家の家督相続させよう、聞き分けて呉れ、お秋此の通ぢや〳〵。

ト行光身を悔ひ手を下げて詫る。

是れにてお秋稍々心の解けたるこなし

秋　其の詞に屹度間違ひはありませぬかへ

行　何で違えてよいものか、

ト此時定吉多蔵[留造]三太五郎を連れ来り

【35丁裏】

定　親方ッ
　ト云ふに行光恟り涙をかくす

三人　御目出度う厶りまする。
　第十四　生傷の絶間無し（行光宅台所）
　爰に女中お作揚板を上げ縁の下より
　炭を出し〃炭取り〃へ入れ居る。
　奥よりお秋出で来り。

秋　お作や炭を出したらお前は茶の間を
　片附けて呉りやれ、

作　はい畏りまして厶ります、
　トお作〃炭取り〃を持ち退場

秋　それにしても五郎はどうして居るのであら

【36丁】

うな、あんなに憎らしい餓鬼ちやァ
ありやしないよ、
　ト四辺見廻し夫れと頷き縁の下の蓋
　をわざと明け置き
　五郎外より荷ない桶にて水を汲み擔
　ぎ入り来る。

秋　五郎ッ　お前今まで何をしてゐたんだよ

五　ハイ。お母様が水を汲めと仰有いましたか
　ら只今汲んで参りました。

秋　又しても口答へをしくさる、それっばっかしの
　水を汲むのに、いつまでかゝってゐるんだへ
　一寸用がある程に爰へお出で　早く爰

【36丁裏】

へ御出と云ふに
　是にて五郎倒れ水をこぼす、

秋　オヤ〳〵お前水をこぼしたね、あゝ分った。
　ト五郎ヂリ〳〵立去るを後から激し
　く突く。是れにて五郎板を踏みは
　ずし縁の下へ片足落し痛さにわっと泣
　き入る

秋　エ、又メソ〳〵と始めたね、いつまでも泣いて
　ゐるがいゝや　意気地無し奴　ザマ見やァ
　がれ、

トお秋悪々しく空うそぶいて奥へ入る
五郎起き上らんとして痛さに上られぬ

【37丁】

此の時定吉出で来り夫れと見て驚
き抱き上げる　五郎の向ふずねより血
汐流れ居る。
第十五　又復継母の折檻（お秋病間）
爰にお秋寢床の上にくゝり枕に凭り病
人の体、女中のお作肩を揉み、傍へに新
太郎居り医者竹庵、藥を調合なし終
りし体。

竹　御新造様是れが煎じ薬でムるが早速召し
上ったらお熱も取れるでムらう。

秋　夫れは有難ふムんす、新太郎や此のお薬を
台所へ持って行って五郎に急いで煎じて来

【37丁裏】

る様に云ひつけてたもいの、

作　イヱ、お薬なら私が煎じて参りませう

秋　イヱお前ではいけないんだよ、新坊早く持
ってお出と云ふに

新　アイ〳〵
ト新太郎薬包を持ち下手へ退場

秋　それから先生、妾此頃ちっとも眠れなくて困
るんですが、お宝はいくら掛っても構ひませぬ
程に夜眠られる様な良い御薬はムんせぬ
かへ

竹　そりや無い事もムりませぬが睡り薬と申す
とお上から御法度の秘蔵で容易に差上げる

【37丁裏】

お薬ではムらぬが外ならぬこちら様の事故
極内々で調合致すが其の代り一腹以上召し上
ると大変な毒になりますからな、

秋　其辺はよく〳〵御注意をなさらんとな、
エッ、夫れぢや毒に……まあ左様でムんすか
そう云ふ御薬なら度々と申しても御面倒で
ムさんせうから五六服一辺に御調合を御頼
み申しまする、

竹　承知致した、では明日にでも早速御届け申さう、愚老は是れでお暇仕る
　ト是にてお秋はお作に命じお作薬札を持ち竹庵を送り両人退場

【38丁裏】

　入れ違ひに五郎茶碗を盆に載せビッコを引き〳〵出来り

五　お母様お薬を煎じて参りました。

秋　オ、五郎かい、御苦労だったねへ、気の毒だが爰へ持って来てお呉れ、オヤ〳〵お前妙な足つきをして何を愚圖々々して居るんだへ、薬が醒めて仕舞ふじやないか、
　五郎傍へ寄り

五　ではお母様お薬を御召しなさりませ

秋　ア、有難ふよ、
　ト薬茶碗を取る振りをしてわざと叩き落す

【39丁】

五　アッ、飛んだ粗匆を致しました、
　と畳を拭ふをお秋屹度睨み附け、

秋　何だえ、粗匆だって空々しい事を御云ひで無いよ、お前は大方なんだらう　妾とはなさぬ仲故邪魔してならぬ故一日でも早く死ぬがしと薬を呑ませまいとわざと落したに違ひない、

五　イヱ〳〵何で其の様な事が厶りませう、御免なされて下さりませう、

秋　御免なさいは聞きあいた、サァ爰へ御出でエ、強情な子だね　お出でったら来ないかへ
　ト床より這ひ出し襟髪を取って引き付け

【39丁裏】

秋　お前の様な強情な奴は斯うしてやるから覚えてお置きよ
　ト五郎の詫び入るのも構はず煙管で散々にぶち据え

秋　エ、モウ顔見るのも病気にさわる早くあっち

へ　（ト突き放ち）　行きくされ
ト憎々しき云ひ分、五郎わっと泣き
入る。
第十六　孝子雪中に水行す（井戸端と台所）
竹本……冷後の雲は次第に降り積り身内も
凍る真夜中過ぎ五郎はそっと忍び

【40丁】

足四辺「アタリ」伺ひ独り言
ト勝手口を明け五郎は忍び出で四辺伺ひ独り
言
五（詞）あゝ寒いなァ（デ雪）斯ふして毎晩お母様
の病気を直さうと八幡様へ願を掛け今日で七
日の満願に少しの利目も無いと云ふのは神様も
此の世には無いものか情無い事ぢやなあ、
竹本……母を思ひ身をかこち神を怨むぞ
哀れなる、五郎は屹度心を定め
五（詞）否々夫だ今晩一晩あるものを勿体なや神様
を御怨み申すは恐ろしい　少しも早く御願ひ
申さう　そうぢや〳〵

【40丁裏】

竹本……然うぢや〳〵と健気にも寒を厭はず
脱ぎ捨てる衣類も何の身一つに震へる
足を踏みしめ〳〵素足に凍る井戸の
側
ト五郎は衣類を脱ぎ捨て凍る双手を口
に当て震へ乍ら井戸側へ寄り合掌なし
五（詞）もうし八幡様何うかお母様の御心触け一日も
早く御病気を御癒しなされて下さりませ、
南無八幡様々々々々
竹本……一心なったる孝子の願望、因果は巡
る車井戸、汲み上げ汲み上げ打
かぶる五郎は声を振り絞り

【41丁】

五（詞）南無八幡様々々々々々、願ひを叶へて下さ
りませ、御願ひ申し上げまする、
竹本……又も立寄りくる〳〵〳〵水は肌を
釘氷　今は堪え兼ねよろ〳〵〳〵

倒れ伏したる有様は無惨と云ふ
も哀れなり。
此方はそれを白河の夢を破られ定
吉が……
と定吉布子の〝寝巻き〟を着て上手より
寝呆け顔にて出で来り。
定（詞）ア、（ト欠伸）好い心持に寝ついたが宵
に一杯やったせいか小用が近くなってなんねへ

【41丁裏】

ドレ一ぬきして来やうか
竹本……つぶやき〳〵立寄る戸口、明くれば
サツト吹込む雪
ト定吉が雨戸を明けると外より雪吹き
込む、定吉は恟り飛び退き
定（詞）おゝ寒い……ヤツ何時の間にか大層
積りやァがったな、道理で身内が冷える筈
だ
竹本……折から聞ゆる水の音
定（詞）此奴は妙だ、真夜中に水の音どうやら井
戸の方角だが不思議な事もあるもんだな
竹本……不審乍らに透し見る

【42丁】

爰に五郎再び水を浴び倒れ居る体
勝手口より定吉首を出し伺ひ居る
五（詞）今日が七日の大事な満願斯うしては居られぬ処
もうし八幡様假令此の身は何うならう共
一命代へて母様の御病気癒して下さりませ
南無鎌倉八幡様々々々々々々々。
竹本……唱ふる声もうらがれてよろぼい〳〵
立上り又取り縋る井戸の綱［ツナ］、夫れと
見るより定吉は
定（詞）ヤツ五郎さんだ　ト飛んでもねへ事をしち
やなんねへぜ
ト抱き留める

【42丁裏】

五（詞）イヱ〳〵放して〳〵
竹本……留めるを突き放け振放し孝子の一

念汲み上る、水は氷か雪の中、ザンブと
浴ぶれば定吉も共に濡れ鷺、堂
を伏し、震え乍らも志かと抱き据へ
定（詞）コウ〳〵五郎さん、滅多な眞似をしちやァな
らねへよ、
五〃　オ、お前は定さん　留めずに放して下さりませ
定〃　まあ〳〵待ちねへ、コウ五郎さんお前はまあ
何と云ふ感心な子だらうな
今彼処で聞いてゐたが此の寒中に水を浴び大
事な命を捨てゝ迚　あの継母の病気をば

【43丁】

怨みもせずに癒さうたあ実に見上げた此方［コナタ］の
孝心、俺ァ聞いてゐてさえ悲しくって泪のとゞめがあ
りァしない、其の孝行な一心でア、鬼の様な継母
のいかな邪慳の角も折れ病気が直るに違ひね
へから最うそれで沢山だ
恁那眞似して此方［コナタ］の身に若しもの事でもあった
ら第一お父さんに不幸になるぜ
ナ　解ったかへ、是れから俺の部屋へ行き温め
て上げようから内へ這入って寢るがいゝよ
五（詞）あいそれぢや定さん今夜の事は父さんにも母
さんにも外の人にも内所にして話をするのは止して
下さりませ、

【42丁裏】

定（詞）可い共〳〵俺ァ決して誰にも云やしねへか
ら安心をするがいゝや、何にしても此の態ぢ
や仕様が無い、オ、幸ひ俺の是れを着るがい
ゝや、
五〃　だってそれぢや定さんが寒いだらう
定〃　何の、お前さんに較べりや寒い事があるもの
かね　サアサア早く着るがいゝぜ
五〃　定さん、お前の親切は忘れませぬ、此の通り
御禮を申上げまする、
竹本……冷える手先に伏拝む定吉堪らず
抱き寄せ
定（詞）オ、ツ、五郎さん　勿体ねへ〳〵お前

【43丁】

さんに其那事をされちや俺らに罰があたりますよ、サァ負ふテ上げるから背中へ

（竹本了）

〜此の間台本二頁無し。

第十七　お秋愈々五郎を憎む（元の病間）

〜写真にて宜敷く頼み舛。

定　エ、い〻方［ホウ］だって其奴ァいけねへ、いっその事早く、くたばって……否何早く癒らなくちやいけやせんね

秋　オイ〳〵定吉、お前一体爰へ何しに来たのかへ

定　ヘイ実は何です少し許りおかみさんの御

【43丁裏】

秋　耳へ入れて置き度い事がありますんでねお神さん貴女の今度の病気はね、罰が当ったんでムへますぜ

定　何んだへね　罰だって……お前何を寝呆けてゐるんだえ、成程此れ許りぢや御解りになりますめへ御話致しやすからどうか聞いておくんなせへまし、可愛相な五郎は貴女の病気を癒さうと八幡様へ願を掛け昨晩もあの大雪の中で裏の井戸端へ出て水を浴び自分の凍えるのも忘れて一心不乱に信心をしてゐなさるぢやムへませんか其那［ソンナ］孝

【44丁】

秋　行な息子さんが何処の国にありますへ夫れも知らずに毎日々々

五　◎此の間台本抜けあり写真にて宜敷くお母さま何ぞ御用でも厶りまするか

秋　オ、五郎か其処ぢや話が出来ないから此方へ御這入りよ、

五　ハイ

ト怖る〳〵座敷へ這入り隅の方へ手を支へる

秋　まあもっと此方へ寄ってお呉れよ、今定吉に聞けばお前は水まで浴びて信心をしてお呉れだそうだね　一体そりや誰の爲にす

【43丁裏】

るんだえ

五　エツそれぢやァ　あの定さんが、実は母様の御病気が一日も早く癒ります様に、

秋　お黙りよ、何だって私の病気が癒る様だって、ヘンお前の信心はそうぢや無からう継しい仲の私故一日も早く死ぬが―と呪って水を浴びたんであらうがな

五　否々何でその様な事が厶りませう

秋　いえ〳〵そうぢや〳〵呪ひ殺さうとしたに違い無い、よくも〳〵小供だてらに大胆なその様な事をしくさって、爰へ来て殺してお呉れ、早く此処へ御出と云ふに

【44丁】

五　アレ御母さま　どうか勘忍して下さいませ

秋　堪忍も好く出来た　サァ此処へ来ないかへエ、剛情な畜生だね

ト傍らの鉄瓶を投げる、鉄瓶の蓋五郎の眉見へ当り血汐流れる。

五郎アッと叫び転ぶ、定吉跳り出で五郎を抱き起し

定　オ、ツ五郎さん　タ大変な怪我を仕なすったナヤイ鬼婆奴、罰当り奴、よくも俺を欺した上五郎さんに迫乱暴な真似を仕やァがったな

ト五郎袖を引く

【44丁裏】

定　いゝよ〳〵五郎さん、心配しなさんな、恁那悪婆にやあ……ヤイくたばり損ねへ貴様の餓鬼の新太郎にやお蠶くるみの栄耀栄華、如何に生さぬ仲たあ云へ此の寒空に、五郎さんにや汚れ腐った袷一枚それさへ、我慢をしてゐるに疵迫付けるたあ何事だ。もう了簡ならねへぞ……五郎さん　打捨って置きねへと云ふに。

秋　オイ〳〵定吉、油かすでもなめたと見えて大層口が達者だね、妾しやお前の主人だ

よ、失禮な事を御言でないよ。

定　何、主人だと、イヽヤ　今日から立派に暇

【45丁】

を貰った。暇さへ取りや五分と五分、是れからは俺が相手だ　五郎さんの代りに貴様の面を叩き破るから然う思へ

五　アレ定さん待ってお呉れ皆私が悪いんだから、どうか我慢をして下されや

定　もう堪忍袋がはち切れたんだ放して呉んねえ、放して呉んねえ

ト定吉が立上りお秋に打って掛らんとする。五郎其手に縋り留めんとする、此時女中のお作出来り五郎と共に一生懸命にて定吉を無理に一間へ連れ去る

【45丁裏】

秋　えゝいま〳〵しい畜生だ、今にどうするか見やあがれ

ト此時上手より新太郎藥包みを入れたる袋を持ち出で来り

新　お母さん　今お医者様から此の眠り藥が届いたよ

秋　オヽ御苦労だったね、サァ〳〵此方へ御出でお前は五郎と違ひ本当に孝行者、さあ此の御菓子を御召りよ、

新　それからね、御医者様の云ふには此の藥は強い藥だから、たんと呑むと命に係るってそう云って飯ったよ、

【46丁】

秋　ア、然うかい、

ト菓子を出して小供に与へる。

第十八　孝子身を投げんとす（由井ヶ浜）

爰へ五郎は腹空してよろ〳〵と泣く〳〵出で来り四辺「アタリ」を見廻し小石を拾ひ袂に入れ傍らの岩に立ち、

五　お父さんどうか勘忍して下さいまし南無阿弥陀仏。

ト將に斯うよと見えたる時此の前よ
り行光の義弟新藤国光仝女房お
りつ来り　此の体を見て驚き
国光急ぎ五郎を抱き留む、

【46丁裏】

国　五郎ぢやないか　ト飛んでも無い事をするぢ
や無いか

五　エ、　こなたは叔父さん放して殺して下さり
ませ、

国　馬鹿な事を云はないで、エ、待てと云ふ
たら待ちねへ、コレおりつ　五郎を確か
り押へて居れ、
ト岩上より砂地へ突きやる。
おりつ下にて抱き留める。
国光も續いて飛び降りる

おりつ　五郎や、お前はまあ　何だって恁那真似
をお仕なんだへ

【47丁】

国　大方深い訳があらうが　此の叔父さんが
目付けた上は決して死ぬには及ばぬぞよ、

おりつ　おや、此の子はまあ大層痩せ細って何
うしたと云ふんだへ

国　アツ、おりつ五郎を見や五郎の額に大変
な疵があるぜ

おりつ　まあどうして恁那怪我をお仕なんだへ、泣
いてゐては仕方が無い、サァ訳をお話よ、

国　訳を聞くにや及ばぬ、此奴ァてっきり鬼婆の
仕事に違ひ無い、如何に生さぬ仲とは云
へ、ひどい事をしやあがったな

五　ア、叔父さん此の疵は棚から鍋が落ちた

【47丁裏】

ので厶りまする、

国　いや〳〵お前がいくら隠しても俺にやちやんと
分ってゐる。モウ今日と云ふ今日は了簡
ならねへ、オイおりつ、俺は五郎を内へ
連れて行かう、お前は是から雪の下へ行って
兄貴を直ぐに連れて来い、

おりつ　ア、ようムんす、夫れぢや五郎を頼みま
したよ、
ト行かんとする、
五　ア、叔母さん待って下さいまし
ト縋り付くを
国　ア、コレお前は俺と

【48丁】

ト無理に引戻し
国　一所に来るのぢや
第十九　往来中で兄妹喧嘩（雪の下町端れ）
りつ　エ、お前は兄さん　妾しや口惜しい、
直ぐに内へ来ておくれよ、
行　ヱ、お前は妹、何だめそ〳〵泣きだして
ア、解った。又相変らず夫婦喧嘩だな
りつ　何でもいゝよ　内へさへ来りや解るんだから
サア妾と一緒に来てお呉れよ、
トおりつ行光を引張り両人争ひ乍ら
退場。
木蔭より右馬之丞出で

【48丁裏】

右　今のは慥かに聟の行光、偖ては兄妹いさ
かい、コレヤ仲裁を出ずばなるまい
ト右馬之丞両人の跡を遂ふ。
第二十　舅嫁の悪心に怒る（国光住居）
爰に火鉢を挟んで国光五郎対話
国　五郎よく打ち明けて話して呉れた、実にお
前は感心な者だ、今お父さんを呼びにや
った程に俺が充分云って聞かせてお前は
内へ引取るからマア安心するがいゝぜ、
五　有難ふムります、だが叔父さんお母さま
はどうか悪く云は無いで下さいませ
国　エッ　コリヤ五郎　散々いぢめられた上未だ

【49丁】

あんなことを云ふのかや
まあいゝから万事は叔父さんに任せて置
け、オヽヤツト茶が沸いた。嘸腹が空いた
だろう、サア是を持って奥へ行き腹一杯

食ふが好いぞや、
五　夫れぢや、叔父さん御馳走になります、
　ト土瓶を持ち奥へ入る。
国　夫れに付けても行光は何をしてゐやあがるんだらう、
　ト待ち兼ねたる折柄、無理に行光を引立てゝ出で来り内へ入れ、
りつ　お前さんやっと兄さんを連れて来たよ、

【49丁裏】

　ト云へど国光は苦り切って居る。
行　国光、其後は無沙汰をして済まぬ　又何か夫婦喧嘩でも仕た様だが、知っての通りのおりつの我侭、何うか私に免じて許してやって呉れ、
国　喧しいやい、誰が夫婦喧嘩をしたと云ふのだへ
行　ホゝ、大層機嫌が悪いが云ふ事があるなら綺麗さっぱりと云ふて呉れたが好いぢやあないか、
国　ヤイ行光、一体アノ五郎はどうする心算りなんだ。殺すなら一思ひに何故殺してやらぬ　成程お前は森川右馬之丞と云

【50丁】

ふ　父[トツ]さんに恩になった義理もあらうがかゝあの尻に敷かれるのも大概にして置きなされ、
行　コウ〳〵国光、藪から棒にそんな事を云はれては　私にはサッパリ訳が解らぬが。
国　そう解らない？　だから腰抜けの意気地無しと云ふのぢや、マア好く聞きなされよ可愛想に五郎はあの鬼の様な母親の病気を直し度いと云ふ一心で雪の降る真夜中水迫浴びて命をかけ信心をしてゐたんだぞ、俺はなァ　それを聞いた時には可愛相で〳〵涙が止まらなかった位だ、

【50丁裏】

　それにどうだ　あの鬼婆奴は五郎の額に鉄瓶を投げつけて大きな疵を拵らえたん

だぞ
行　エ、ツ　夫れぢや鍋が落ちたと云ふたのは
　あのお秋が…
国　未だ〳〵それ許りぢやない、結局は毒
　を盛って五郎を殺さうと云ふ悪計み
　五郎が夫を知った故　今日で四日と云ふも
　のは干乾しにされてゐたんだぞ
行　エ、ーツ
国　サァ是丈け云へば用はねへ　五郎と親子の
　縁を切れ　今日から俺が引取って

【51丁】

　立派に一人前にして見せやうから。
　手前は是から内へかへッて嬶大明神と祭って
　朝晩拝んでゐやあがれ、
　　ト是にて行光はっと俯向き深い思入れ
りつ　もし兄さん　お前あんなに云はれても
　口惜しくは無いのかへ、五郎が由井
　ヶ浜で身投げの所を私達二人が助け
　て来たんだよ、それも知らずにのみ〳〵
　と好くもそうして居られるね、夫婦喧
　嘩所の騒ぎぢや無いよ、ほんとに
　愛想もこそもつき果てたよ、
　　とおりつ泣き伏す

【51丁裏】

行　エエ、国光、おりつ許して呉れ、親身
　なればこそ夫れ程迫に云ふて呉れた
　お秋が毒を盛って殺さうとまでした
　事は知らなかった。モウ〳〵我慢が出来
　ぬ、屹度、らちを付けるがそれ迫五郎
　を預って置いて下され、此の通り私が
　頼みだ、二人共許して呉れ、
国　よし、そう云ふ事なら待ちも仕様が
　一体その始末は何うしてつけるのだ
右馬　アイヤ　其の始末は某がつけるで厶らう
　　ト右馬之丞内へ入る。
国　ヤツお前は森川、何で俺の家へ這入

【52丁】

って来たのだ
右　サァ其の御立腹は御尤。聞けば聞
く程　恐ろしい娘が悪心、親子の縁を
切った上、秋奴を成敗致して申訳け仕
らん、何れも方　御免下さい、
行　モシ舅殿それはあんまり短気と云ふ
もの
　ト引留める、
右　エ、放せ、放して呉れ
　ト行光両人で右馬之丞と爭ふ。
　国光は構はずにやれと云ふ思ひ入れ、
　此の中五郎奥より首を出し　此の体

【52丁裏】

に愕き裏口の障子明け一目散に
走り去る。
右馬之丞は行光を突き退け走り
行く。
第二十一　五郎母に急を告ぐ（途中と住居）
爰へ五郎一散に走り後より右馬之
丞　追取刀にて出来り、同じく後よ
り行光、国光、おりつの三人別々に走
り出で遠く森蔭に隠れる、
行光の住居、
お秋は病後の針仕事
五郎襖を蹴飛ばし急ぎ来る。

【53丁】

五　モシお母さん大変です、今御祖父さ
んが御怒りになってあなたを斬ると云
ふて御出でになります　早く逃げて
下さりませ、早く〳〵〳〵〳〵
秋　又そんな嘘を云ふて私を愕かそうとす
るんだね、何て太い奴だらう、覚えてゐ
ろ、
　トお秋五郎を尺にて打ち据える処
　へ右馬之丞来り
右　己れ不孝者　親が手づから成敗
　致す
　ト一刀　抜き放す

【53丁裏】

五　アレ祖父さま何うぞ待って下さりませ
　ト縋り付く

右　危い、退いて呉れ　退けと云ふに
　ト振り放しお秋に斬りつける
　お秋一目散に逃げる、
　右馬之丞後を追ふ。
　五郎続く
　行光、国光、おりつ此の様を見て同じく
　後を追ふ。
　第二十二　孝子の一心継母の悔悟
　（八幡宮石段）
　お秋髪振り乱し石段に上る

【54丁】

　右馬之丞お秋を斬らんと追ふ
　さはさせじと五郎止める。
　お秋、右馬之丞　五郎、暫し入り乱れて
　争ふ。
　遂にお秋石につまづき転ぶ。
　右馬、得たりと斬り付けんとする一髪
　五郎お秋の上に伏し、右馬の一刀勢
　に余り五郎の背に真一文字。
　五郎アッと倒る。

右　ア、　それぢや　五郎をば
　ト愕く、
　お秋呆然たり。

【54丁裏】

　行光、国光来り共に驚く

行　ヤヤッ　これや五郎が手疵を負ふた
　か。

国　エイツ、おりつ、早く医者を呼んで来
　い、早く〳〵〳〵〳〵

りつ　アイ〳〵
　トおりつ去る、
　行光国光五郎の介抱を為す

行　コレ五郎、気を確かり持て、父だよ

国　疵は浅い　確かりしろ〳〵

五　エ、お父さま、叔父さま、そうして
　　お母様は？

【55丁】

行　おゝ　お秋は無事だから安心しろ

右　コレ孫よ、許して呉れ、そなたに深手
　　を負したも皆此の爺の粗忽、
　　此の上は身代投げ捨てゝも　快抱させ
　　ねば置かぬよ、

五　アヽモシ祖父さま、あなたに科[トガ]はム
　　りませぬ、私は元より覚悟の上、斬
　　られたのでムりまする。

三人　ナヽ、何と云やる。
　　ト此より篠入り。

五　お母さまの御身代りに死ぬと思った私
　　は本望。只此の上の御願ひには、最後[イマワ]

【55丁裏】

　　の際[キワ]にお母さまより、五郎可愛や
　　とたった一言御聞かせ下さりませ、
　　此れが此の世の私の御願ひでムります、

行　エ、五郎　よく云ふた。よく云ふて呉れ
　　た。お秋、今の五郎の詞を聞いたか
　　邪見な親を怨みもせず一命捨てゝの
　　優しい心。是でも五郎を憎いと思
　　ふか　イヤサ　是でも迷ひが醒めぬかや

秋　……おゝそうぢや
　　トお秋落ちたる一刀にて自害せん
　　とする。行光留め、

行　エ、お秋、何故お前は自害するのぢ

【56丁】

秋　や、
　　何で死ぬとはお情け無い、今の五郎の
　　一言で今日と云ふ今日夢が醒め、何の
　　生きて居られませう。五郎への詫は
　　今目の前で、どうぞ放して下さりま
　　せ。

行　エ、狼狽たへたか痴気者奴、今己れ
　　が死んだとて五郎の命が救かるか、此
　　の上　我に難儀をかけるのか、エ、云ふ

様の無い、アヽコヽナ不所存者奴が
ト刀をもぎ取る。
秋　それでは死ぬにも死なれませぬか。

【56丁裏】

トワッと泣き伏す、
国　エヽそれでこそ誠の心　少しも早くそれ
五郎を
秋　アイ
とお秋五郎を抱き寄せ
秋　コレ五郎　今迄の私の罪はどうぞ許し
てたもいのう
五　オオ、お母さま
五郎も縋り、お秋も抱き
苦しき内にも嬉こびに泣きくれる。
此の時おりつ医者を連れ、定吉
留造お作附添ひ来り　医者は

【57丁】

急ぎ五郎の疵を見る。
第二十二［ママ］　楠正成の使者（行光住居　内、広間）
五郎を中心に、右馬之丞、行光、国
光、お秋、新太郎、おりつ居並び
お作、留造三太酌をなし、五郎
が全快祝ひの体
右　アレ〳〵酩酊致した。如何と思ひし五郎の
手疵も全快致して祝の酒宴、身共が
望みも相叶ひ斯様に嬉しい事は無い
ぞへ。
五　是と申すもお祖父さまや皆様方の御
丹精、有難ふ厶りまする。

【57丁裏】

秋　それに就いても一つの御願ひ、今日から新太
郎を別家させ此の五郎に当家の跡目を
取らせて下さりませ、
国　是と云ふのも孝の徳、
りつ　御目出度う厶りまする
ト嬉しきこなし。此の時定吉出で
来り

定　モシ親方　今玄関に西国の楠家の使
者だと云ふて親方と五郎さんに是非御
目にかゝり度いと立派なお侍の様なお
方が御出で厶りまする。
行　エッ楠家の御使者だと、御丁寧

【58丁】

に御通し申せ、
定　承知しやした。
　　ト定吉退場、
右　それでは私は暫く次へ退座致さう
皆も参るがよい、
　　ト右馬之丞、一同退場、
　　五郎と行光残り、定吉の案内した楠
　　家の臣江見野良三出で来り上座
　　へ通り　定吉退場
行　コレハ〳〵ようこそ御越し下されました、
私が当家の主、藤六行光、また是
れに居りますが一子五郎に厶ります

【58丁裏】

お見知り置かれ下さりませう。
良三　御叮嚀な御挨拶、拙者は楠正成の
家臣、江見野良三と申する者。
実は此度び御主君には当家の子息
五郎殿の孝心深きを聞し召され御
公達正行公が其の孝道にあやか
る様と五郎殿に守り刀を打たせて
呉れよとの即ち使命、此の儀御
承知下され度し。
行　此の身に余る御諚。有難ふ存じま
するが未だ若年の伜、何卒今より
五ヶ年の御猶予下だし置かれませう。

【59丁】

良　ム、そりや五ヶ年相経れば見事鍛へて
呉れるのぢやな、
行　御詞迫も厶りませぬ、此の命抛げ出
して御刀を仕上げさするで厶りまする。
良　早速の承引、嘸君も御満足。屹

度　詞を傳へ申すぞ
第廿四　五郎銘刀を鍛へ上る。（井戸端と仕事場）
此の間五ヶ年経過
行光宅　勝手口　元の井戸端
爰にお秋水を浴び彼方に向ひ合掌
し
秋　南無鎌倉八幡宮　何卒五郎に銘

【59丁裏】
刀を鍛へさせ下さる様　願望成就なさしめ
給へ南無八幡大菩薩々々々々々々々。
と一心不乱に祈願を凝らす、
行光、鎌倉八幡宮を祭り居る、
行光と五郎（当時十八才）紋沙の狩
衣に武士烏帽子を冠り一心に刀
を鍛へる。
行　オ、美事の上げ鎚、それ湯加減
せよ。
五　ハハァ
と五郎刀を風呂に入れる。
湯気茫々と立舞る。

【60丁】
五郎引出し行光に示す。
行光じっと眦め、
行　五郎でかした。適れ名刀打ち上げ得
たぞ
画面朦朧と変る
元の井戸端　お秋は水に凍へ絶
息して居る。
行光、五郎の両人出来りそれと見
て愕き介抱なし。
行　コレお秋何うして居る　確かりしろ〳〵
五　母上様　五郎で厶りまする　お心確かに
お持ち下されませ、

【60丁裏】
秋　エ、五郎、行光殿か
行　心附きしか、して又そなたは何故にかゝる
水行致して居るのぢや、

秋　サァ是も皆過し年、五郎に受けた恩
返し適れ名刀打たす為め、
五　ヱヽツ　そりや私の為めに母上様、有
難ふムりまする。
秋　して御刀は出来ましたか、
行　エヽ、そなたの一念空しからず世にも
稀なる銘刀を五郎が鍛へ上げたるぞ
よ。
五　是と申すも母上様が身に余る御厚

【61丁】
恩
秋　イヱ〳〵妾の手柄ぢやムんせぬ
皆八幡様の尊い御利益、思へば嬉しや
喜ばしやなァ
お秋伏し拝む、
五郎は母に礼を述ぶる
第二十五　楠家へ五郎伺公す
（楠正成舘）
爰に正成一子正行（十才）扣へ其他家
臣大勢居並ぶ。
折から家臣江見野良三は五郎の
鍛へたる刀を三宝に乗せ来る

【61丁裏】
良　ハハァ　東国鎌倉ノ住人、行光が一子五
郎　兼ねて申付けの一刀持参致してムりま
する、
正成　オヽそれ待ち兼ねしぞ　予が楠正成な
るぞよ、
正行　又私は嫡男正行。よくぞ持参して呉
れたのふ。
行光　直々の御目通りに有難き御詞、恐
れ入って ムりまする。
正成　それなる一刀是へ持て、許す、近ふ、
行光　其れ御前へ
五郎　ハハァ。

【62丁】
と一刀の箱を持ち敬々しく立寄り

五郎　イザ御披見下さりませう
正成　オヽ
　　ト一刀を抜き
正成　オヽ、焼刃の匂ひ水や滴らん、天晴れ名
　剣家の重宝
正行　天晴れ五郎出かし居ったな。
五郎　ハハァ　恐れ入って厶りまする、
　　ト一刀を拭ひ鞘に納める。
正成　斯る奇特を見る上は親子の者に頼み
　入れたき一義あり。
　此度関白九條殿の姫君夜な夜な

【62丁裏】

　物の怪に襲れ給ひ御悩み烈［ハゲ］しき折
　柄一子正行〝物の怪〟見届けが役を
　承る。其方それなる名剣にて正行
　に力を添へ　退治なしては呉れまいかの
行光　ハハァ勿体無き其の御諚。斯る仰
　を蒙る上は一命かけても此の御役目勤
　めさすで厶りませう。
正成　オヽ、能くぞ申した、良三万事仕度を
　致せよ、
良三　ハハァ
　　と平伏す
　第廿七　庭前に怪しき女性（九條殿寝所）

【63丁】

　爰に姫君、高枕釣り夜具に凭れ
　枕頭に関白公其他侍女大勢附添
　ひ正面は一面の御簾、菊燈、灯し
　ある。
関白　コリヤ姫よ、今は悩みも　あらざるか、
姫　ハイ今は少しの悩みさえ
　　と云ひかける。
　此時一時に灯消え、
　アレ〳〵〳〵又も私を苦しめるは何物の
　祟ぞや、エヽ堪え難や　若しやなァ
　　ト姫〝物の怪〟に襲はれ苦しみ悶
　　える、関白気遣ひの体にて

【63丁裏】

関白　それ女共　庭前の警固せよ、

侍女　ハハァ

ト官女一同屹度なる。

画面一転

爰に一陣の魔風起り暴風雨来り

樹木狂乱す

空中より怪鳥―形は雉に似たる大

鳥にして、顔狐の如く、嘴長く、

尾四五本長く垂れ其先蛇の形を為

す―砂を巻いて忽然十二単衣を

着した官女に変じ御簾の中を屹

度睨む。

【64丁】

口は耳迄裂け　形想物凄く、絵扇

を翳し階段に足をかけ御簾の中

へ入らんとする時左右より侍女大勢

薙刀を持って走り出ず

侍女　ソレ曲者　推参なるぞ

怪　何を、

ト侍女と怪女の激しい打ち合ひ

侍女散々に悩まされる。

此の時正行身拵へ凛々しく走り出で

正行　ヤア　怪しき女性奴　楠正成が一子正行、

イデヤ正体現はし呉れん。

怪　小癪な事を

【64丁裏】

ト正行は刀、怪女は絵扇にて相方

必死の斬り合ひ、

遂に怪女正行の襟をつかみ元の怪鳥

に姿を変じ空中高く舞ひ上る

五郎　オヽ御公達が御身の危難、己れ怪物

観念せよ、

と五郎半弓を引絞る、

第廿八　銘刀の威徳怪鳥を退治す

（空中と山中）

爰に怪鳥再び女房となり黒雲を

呼び正行をつかみし侭　何処へか去ら

んとす

【65丁】

其処へ一矢怪鳥のこめかみに命
中しアッと手を放し正行地上に
落下す、
怪鳥狂乱して飛び去る、
画面一変
物凄き山中の体
正行空中より落下五郎走り
来り

五郎　オ、若君様、御息災にておはせしか、
正行　オ、五郎か　そなたの助太刀過分なるぞよ、
五郎　イデ此上は銘刀を示して退治して呉れん
ト五郎屹度空を見上げ一刀を抜

【65丁裏】

き放ち差し付ける、
是れにて空中より怪女苦しみ舞ひ下
り

怪　ウーム偖は刀の威徳にて、我が妖術も叶
はぬか、思へば無念口惜しやな、
正行　一刀の下に仕留め呉れん、
五郎　叶はぬ処と観念せよ、
怪　何を、
ト是れにて双方烈しき争闘、怪女刀の
威に恐れ充分に働き得ぬこなし
五郎の一刀に眉間を斬られ正行此
の隙に脇腹をえぐる。

【66丁】

怪女正体を現はし絶命す
関白牛に跨り侍女大勢を連れ出で
来り

正成　オ、天晴れ五郎　能くぞ怪鳥仕留
め得たぞ
関白　其方の働らきにて姫の悩みも平癒せ
り。其の功によりて今日より禁理［裏］
御番殿存［鍛冶］に召し出し、名も五郎
宝隆正宗と名乗り長らく忠勤

尽くすが好いぞ
五郎　ハヽア有難ふ存じまする、
正成　是れも偏に孝道の鍛へ上げたる刀

【６６丁裏】

の威徳、
関白　実［ゲ］に孝行は国家の礎ぢや喃
ト賞す
一同平伏す
時に鶏鳴暁を告る、
映画了

【６７丁】
［白紙］

【６７丁裏】
［白紙］

【裏表紙】